

# これからのアカデミック・ ジャパニーズ

門倉正美(元・横浜国立大学留学生センター)

[masamikadokura@hotmail.com](mailto:masamikadokura@hotmail.com)

# 構成

1. アカデミック・ジャパニーズは教養教育である
2. 「テーマを立てる」力を養う
3. もっとICTを活用しよう！
4. 今後期待される研究・教育領域

# 1. アカデミック・ジャパニーズ(AJ)は 教養教育である

## 1-1 「アカデミック・ジャパニーズ」という言葉の由来

- AJという概念は、日本留学試験に向けて導入された。「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」

『日本留学のための新たな試験について』(2000)

- 「日本の大学での勉学に対応できる」ということの内実をどうとらえるか？ → 「対応する」ための土台としての「教養」
- 「日本語力」の「力(りょく)」という表現がおもしろい。「力」は、狭義の「語学能力」にとどまらない意味を示唆する、ととれる。→「学士力」「コミュニケーション力」「実力」など  
→「力(りょく)」の土台としての「教養」

## 1-2 AIは「転換期教育」である

- 「教養教育」の根幹に「転換期教育」という側面がある。
- 「転換期教育」とは、学生に「教わる」→「学ぶ」への「転換」を促す教育である。
- 「学ぶ」ことへの学習者の既成観念を見定める必要がある。
- AI概念導入時(2000年頃)では「総合的学習」が喧伝されていた。
- 新学習指導要領(2018/19年度)では、「主体的・対話的で深い学び」や「アクティブ・ラーニング」が唱えられている。
- 学習者を「主体的・対話的で深い学び」へと触発する「ことばの教育」とはどのようなものか？

## 1-3 日本語教育は単なる言語教育ではなく、「教養教育」であらねばならない(1)

- 日本語教育と他の学問の教育との関係は、「主体的・対話的で深い学び」を触発する「教養教育」という観点からすれば、**ジェネラリストとスペシャリスト**との関係になぞらえることができる。
  - 「ことば」こそが総合的な知を土台としているからである。
  - 日本語教育者は、言語教育者を二流市民とする傾向のある日本の大学文化に対抗できる「実力」をさまざまな方策で獲得する努力が必要である(佐藤慎司ほか2018)。

## 1-3 日本語教育は単なる言語教育ではなく、「教養教育」であらねばならない(2)

- これまでの日本語教育の特長は、次の点にある。1) 言語を総合的・相対的にとらえられる、2) 4技能を総合的にインタラクティブに教育できる、3) 異文化間コミュニケーション力を生かせる(バイラム2015)。
- これらの特長を活かして、日本語教育者は、「主体的・対話的で深い学び」を触発するジェネラリストたり得る。
- 「主体的・対話的で深い学び」を触発するためには、**教員自身が、「主体的・対話的で深い学び」を普段から展開していなければならない。**
  - 自らのアカデミックな土台・問題意識(と、その広がり)を再確認し、それを掘り下げる。
  - 自らの「いま・ここ」への知的アンテナを敏感にする。

# 1-4 「教養」とは、「いま・ここ」を掘り下げることから始まる(1)

- 学習者と私たちが、いま、どんな世界(社会・政治経済・環境・境遇・気分・好悪等々)を生活しているのかを探ることから「教養」教育が始まる。
- それを探るための基礎知識・基本的方法のセットが、高校までの教育で得た「市民的教養(の土台)」ともいうべきものである。→ 外国人学習者の場合も、母語でそれらを既に獲得している。それらをどのように日本語での「教養」に転移させるかが日本語教育の課題となる。
- 「市民的教養(の土台)」として、以前は高校教科書の総復習と特に「現代社会資料集」が役立つと思っていた。(佐藤優 2012も同意見)

## 1-4 「教養」とは、「いま・ここ」を掘り下げることから始まる(2)

- 現在のおすすめは、以下の3書と、ウェブ新聞の1か月スクラップ。
  - 1) 松岡正剛(2000)『知の編集術』講談社現代新書
  - 2) 荻谷剛彦・西研(2005)『考えあう技術—教育と社会を哲する』ちくま新書
  - 3) 佐藤優(2012)『読書の技法』東洋経済新報社
- ウェブ新聞の1か月スクラップ:「テーマを立てる(第2節)」うえで、自分自身の関心を見つけることが大切。<私探し>よりも、「私が引っかかること・私が面白いこと」探しの方が生産的。



## 2. テーマを立てる

### 2-1 日本語教育の場を活かす

- 「主体的・対話的で深い学び」を行うための第一歩であり、決定的に重要なのは、学習者が自分で「テーマを立てる」ことである。
- 学習者が自分で「テーマを立てる」ようにするためには、**教員が豊富な、自分自身の「テーマ」**をもっていなくてはならない。（ワークショップ型学びでは、「教師はつねに学習者とともに同じ方法で学びつつける」）。
- 日本語教員の優位性として
  - **異文化接触**の場にいる
    - カルチャー・ショック、異文化間コミュニケーション
  - 学習者の言語との対照言語学的考察

## 2-2 「当たり前」を問い直す

- 古代ギリシャ以来、カルチャー・ショックは哲学の沃土だった。
- 哲学の本領は、「当たり前」を問い直すところにある。
  - 「真の哲学とは世界を見ることを学び直すことである」  
(メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』より)
- 「当たり前」を問い直すまなざし(方法・視点)を獲得すれば、私たちの「いま・ここ」、日常生活のいたる所から「テーマを立てる」ことができるはずである。
  - 松川・樫本ほか(2014)『哲学カフェのつくりかた』大阪  
大学出版会所収の「哲学カフェ問題集」参照

## 2-3 「テーマを立てる」ための、いくつかの方法(1)

・「テーマを立てる」ことを促す方法としては、哲学カフェ以外に以下の教育・学習方法がある。

### 1) 「問い」づくりアプローチ (Question Formulation Technique)

ロスステイン、サンタナ(2015)『たった一つを変えるだけ』新評論

### 2) デザイン思考 (Design Thinking) (→第4節)

ブラウン(2014)『デザイン思考が世界を変える』早川書房

### 3) 探究 (Inquiry) アプローチ

ピアス著・門倉ほか訳(2020)『だれもが<科学者>になれる!』  
新評論

### 4) ワークショップ型学び

フレッチャー、ポータルピ(2007)『ライティング・ワークショップ』  
新評論

## 2-3 「テーマを立てる」ための、いくつかの方法(2)

- 教員の「テーマ」蓄積のためには、上記のウェブ新聞スクラップの他に、
- **新書粗読み** 涉獵
  - 二通・門倉・佐藤(2012)『日本語力をつける文章読本 : 知的探検の新書30冊』東京大学出版会 参照
- 哲学カフェ問題集(上記『哲学カフェのつくり方』所収)
- 『文藝春秋オピニオン 2020年の論点100』文藝春秋
- 宮台真司(2014)『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬社
- メディア・リテラシー(→第4節)
- Heydorn、Jesudason(著)、Z会編集部編(2016)『**TOK(知の理論)**を解説する : 教科を超えた知識の探究』株式会社Z会等が参考になる。  
TOK: Theory of Knowledge 知のあり方の探究

## 3. もっとICTを活用しよう！

### 3-1 日本語テキストや問題集の内容をウェブで補充する

- 『上級へのとびら』ウェブサイト  
「コンテンツとマルチメディアで学ぶ」というコンセプトに共感  
<http://tobiraweb.9640.jp/>
- 国際交流基金『まるごと』: 音声ファイルや語彙のリストなどをダウンロードできる。
- 『ポップカルチャー New & Old』: 読み物をウェブサイトに掲載することによって、ポップアップ辞書などの読解補助ツールを使って、単語や漢字を素早く調べながら読み進めることができる。

### 3. もっとICTを活用しよう！

#### 3-2 学習材をウェブにアップロードし無料で提供する

##### :カーン・アカデミー型日本語学習材ポータルサイトの構築

- カーン・アカデミー(Khan Academy)とは？ 2006年にサルマン・カーンによって設立された無料の学習サイト(カーン2013参照)。
- 日本語サイト<https://ja.khanacademy.org/>で「算数」のコースや、本場の英語サイト<https://www.khanacademy.org/> を覗いてみよう。
- **カーン・アカデミーの「算数・数学」のような充実ぶり**は高嶺の花だが、それを理想とした日本語学習材のYouTube素材の蓄積を目指せないだろうか？ —まずは、既成の学習サイトをポータルサイトによって集約して、ガイドラインをつくることが先決かもしれない。

### 3. もっとICTを活用しよう！

#### 3-3 スマホで日本語を学べる学習材を充実させる

- 現在利用可能なものを総点検する(学習者の力を借りる)。
- スマホでアクセスできる辞書・翻訳機能・試験対策問題集・日本語テキスト・日本語学習サイト・観光サイト・自治体サイト等々の「批評」ポータルサイトをつくる。
- 個人的には、スマホで気軽に読める多読学習材サイトと、基本語からまず始めて、実践的な用例が豊富にある辞書サイトがほしい。

### 3. もっとICTを活用しよう！

#### 3-4 テレビ会議アプリ(Zoom)を活用する

- 海外の交流協定校の日本語学習者と簡単に共同授業ができる。
- 国内外の研究者と簡単に打ち合わせやワークショップができる。
- 授業において多様なゲストにZoom出演してもらえる。
- 留学生へのカンファランスがいつでもどこからでも行える。



### 3. もっとICTを活用しよう！

#### 3-5 ツイッター#(ハッシュタグ)で

#### 教育実践の意見交換をする

- AJJの「短信」はもともとはAJの教育実践の意見交換を気軽に密に行うことが目的だった(当初は留学生指導研究協議会のMLでの密な意見交換に学びたいと思っていた)。
- ツイッター#(ハッシュタグ)で教育実践の場면을映像とコメントで紹介できる。(クーロス(2019)、Hicks(2013)参照)。
- 日本語教育の良さである「同僚性Collegiality」が比較的強いことを活かして、実践研究の進展に資することができるのではないか。
- ブログをうまく使えば、同様の効果をもたらされるだろう。

### 3. もっとICTを活用しよう！

## 3-6 Digital Writingを推進する

- 学習者のdigitalな面での能力と興味を活かす教育・学習形態として、digital writing教育が有効に思える。
- digital writingでは、単に文章テキストだけでなく、写真、映像、イラスト、ウェブサイトへのリンク、音声、音楽などが自在に組み込める。
- Troy Hicks (2013); *Crafting Digital Writing*が懇切な指針を提供している。彼のHPも手助けになる。

### 3. もっとICTを活用しよう！

#### 3-7 ICT活用WGをつくる

- Learning Management Systemを利用して学習者の学習ポートフォリオをつくる等、他にもさまざまなICT活用が考えられる。
- ICTに強いメンバーのグループを形成して、AIにおけるICT活用の可能性を検討し、必要に応じて研修や広報活動を行うことが期待される。

## 4. 今後期待される教育・研究領域

### 4-1 AJ論文・書籍の批評活動

- AJJにAJGメンバーによる書籍の書評を掲載する。
- 3年周期くらいのペースで、3年間のAJ教育・研究を総括批評するような論考を掲載する。

### 4-2 日本語表現法や異文化間コミュニケーション論

- 留学生と日本人学生の混成クラスにおける異文化間コミュニケーションを促進する。
- 日本語教育の観点からの母語話者に対する「日本語表現法」の構築。

### 4-3 EJU試験問題の分析と改良への貢献

- 日本語能力試験、TOEFL、TOEICの試験問題等も比較対照して試験問題を分析し、必要に応じて改良を提案する(門倉2009)。
- AJ論文についてと同様、AJ能力を問う試験問題に対しても「批評」が必要である。

### 4-4 「アカデミック・イングリッシュ (English for Academic Purposes)」の動向を把握する

- Ken Hyland ed. (2006); *English for Academic Purposes*, Routledge
- General or specific? Study skills or academic literacy?等、AJの論点と通じるテーマが論じられている。

## 4-5 アカデミック・スキルズ

- 佐藤 望編著(2020)『アカデミック・スキルズ(第3版) — 大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会
- 「大学生向け学習指南書のベストセラー」。
- 留学生向きには、「市民的教養の転移」の側面をカバーする必要があるだろう。

## 4-6 多読要素の導入

- 栗野真紀子ほか(2012)『日本語教師のための多読授業入門』アスク
- 門倉正美(2018)「リーディング・ワークショップで多読する」AJジャーナル第10号所収

## 4-7 メディア・リテラシー

- 大半の学生が新聞を読まなくなり、またフェイクニュースが跋扈するようになった現在、メディア・リテラシーはますます緊急の教育課題になっている。Digital literacyへの展開も必要。
- カナダオンタリオ州教育省編(1992)『メディア・リテラシー: マスメディアを読み解く』リベルタ出版、古書

David Buckingham(2019); *The Media Education Manifesto*, Polity

## 4-8 クリティカル・シンキング

- メディア・リテラシーはクリティカル・シンキングを強調している。クリティカル・シンキングは、「教養」探究の土台となる態度である。
- 楠見 孝、子安 増生、道田 泰司共編(2011)『批判的思考力を育む -- 学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣
- 道田 泰司、宮元 博章 (著)、秋月りす (イラスト)(1999)『クリティカル進化(シンカー)論—「OL進化論」で学ぶ思考の技法』北大路書房

## 4-9 視読解

- アカデミックな読み書きでも、「文字テキスト＋視覚表現」の読み解きが重要となっている(図解や図読、マインドマップ、digital writing, TEDの presentation, 図表、グラフ、PPT論等)。
- CMやマンガの読み解きや、図解・図読を日本語学習に導入するのもおもしろい。
- 門倉正美(2011)「コミュニケーションをく見る」『早稲田日本語教育学』所収(ウェブでタイトル、著者名を検索すれば、pdfが入手できる)。

## 4-10 2つの「マルチ」: Multiliteracies と

### Multiple Intelligences(多元知能)

- リテラシーや知力を、これまでよりも多元的にとらえる観点からの日本語教育アプローチが興味深い。
- Cope & Kalantzis (2000); *Multiliteracies—Literacy Learning and the Design of Social Futures*, Routledge  
アームストロング(2002)『マルチ能力が育む子どもの生きる力』小学館



## 4-11 デザイン思考 Design Thinking

- デザインの力がビジネスをはじめとする多様な領域で開発されている。「デザイン思考」を言語教育に導入する試みも始まっている。

- ブラウン(2014)『デザイン思考が世界を変える』早川書房

Lee-Ellis and Bernhardt; *Bringing Design Thinking to Language Curriculum Design*

[https://www.actfl.org/sites/default/files/tle/TLE\\_JanFeb17\\_Article.pdf](https://www.actfl.org/sites/default/files/tle/TLE_JanFeb17_Article.pdf)

## 4-12 地元学

- 学習者が「いま・ここ」を各自の角度から掘り下げる。LocalとGlobalが結びつくGlocalな視点を目指す。金沢学、高知学などの前例あり。
- 吉本哲郎(2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書

## 4-13 語彙ネットワーク

- 「教養としてのAJ」の語彙をネットワークとゲーム性で習熟することを促すテキストや語彙集
- ・石澤ほか(2018)『語彙ドン！』くろしお出版

## 4-14 市民性を涵養する

- 「教養としてのAJ」の土台に、民主主義の担い手としての市民を涵養するというメディア・リテラシーの理念を重ねたい。
- ・マイケル・バイラム(2015)『相互文化的能力を育む外国語教育』大修館書店

## 参考文献

### 1. アカデミック・ジャパニーズは教養教育である

「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議(2000)『日本留学のための新たな試験について』

佐藤 慎司ほか編(2018)『未来を創ることばの教育をめざして: 内容重視の批判的言語教育(Critical Content-Based Instruction)の理論と実践』ココ出版

マイケル・バイラム(2015)『相互文化能力を育む外国語教育』大修館書店

松岡正剛(2000)『知の編集術』講談社現代新書

苅谷剛彦・西研(2005)『考えあう技術—教育と社会を哲学する』ちくま新書

佐藤優(2012)『読書の技法』東洋経済新報社

### 2. 「テーマを立てる」力を養う

メルロ＝ポンティ(1967, 1974)『知覚の現象学1, 2』みすず書房

松川・樫本ほか(2014)『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会

ロスステイン、サンタナ(2015)『たった一つを変えるだけ』新評論

ブラウン(2014)『デザイン思考が世界を変える』早川書房

ピアス著・門倉ほか訳(2020)『だれもが<科学者>になれる!』新評論

フレッチャー、ポータルピ(2007)『ライティング・ワークショップ』新評論

二通・門倉・佐藤(2012)『日本語力をつける文章読本: 知的探検の新書30冊』東京大学出版会

『文藝春秋オピニオン 2020年の論点100』文藝春秋

宮台真司(2014)『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬社

Heydorn、Jesudason(著)、Z会編集部編(2016)『TOK(知の理論)を解読する: 教科を超えた知識の探究』株式会社Z会

### 3. もっとICTを活用しよう！

岡まゆみほか(2009)『上級へのとびらーコンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語』くろしお出版

『上級へのとびら』ウェブサイト <http://tobiraweb.9640.jp/>

国際交流基金『まるごと』ウェブサイト: [まるごとサイト https://www.marugoto.org/](https://www.marugoto.org/)

花井 善朗(2017)『ポップカルチャー New & Oldーポップカルチャーで学ぶ初中級日本語』くろしお出版

サルマン・カーン(2013)『世界はひとつの教室「学び×テクノロジー」が起こすイノベーション』ダイヤモンド社

ジョージ・クーロス(2019)『教育のプロがすすめるイノベーション』新評論

Troy Hicks(2013); *Crafting Digital Writing*, Heinemann

### 4. 今後期待される教育・研究領域

門倉正美(2009)「日本留学試験のプロフィシエンシー:「複テキスト性」という観点の提案」AJジャーナル第1号

Ken Hyland ed. (2006); *English for Academic Purposes*, Routledge

佐藤 望編著(2020)『アカデミック・スキルズ(第3版)ー大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会

栗野真紀子ほか(2012)『日本語教師のための多読授業入門』アスク

門倉正美(2018)「リーディング・ワークショップで多読する」AJジャーナル第10号

カナダオンタリオ州教育省編(1992)『メディア・リテラシー: マスメディアを読み解く』リベルタ出版

David Buckingham(2019); *The Media Education Manifesto*, Polity

楠見・子安・道田共編(2011)『批判的思考力を育む--学士力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣

道田 泰司、宮元 博章(著)、秋月りす(イラスト)(1999)『クリティカル進化(シンカー)論ー「OL進化論」で学ぶ思考の技法』北大路書房

門倉正美(2011)「コミュニケーションをく見る」『早稲田日本語教育学』(ウェブサイトで入手可能)

Cope & Kalantzis (2000); *Multiliteracies—Literacy Learning and the Design of Social Futures*, Routledge

ブラウン(2014)『デザイン思考が世界を変える』早川書房

Lee-Ellis and Bernhardt; *Bringing Design Thinking to Language Curriculum Design*

[https://www.actfl.org/sites/default/files/tle/TLE\\_JanFeb17\\_Article.pdf](https://www.actfl.org/sites/default/files/tle/TLE_JanFeb17_Article.pdf)

吉本哲郎(2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書

石澤ほか(2018)『語彙ドン!』くろしお出版

マイケル・バイラム(2015)『相互文化能力を育む外国語教育』大修館書店